

## 義演准后日記に現はれたる醍醐三寶院庭園

東京大學農學部 吉 永 義 信

日本の古庭園の多くは築造當時の歴史を明かにしないが醍醐三寶院庭園のみはこの庭園の初期の歴史を最も明瞭に知り得るのであつてそれは金剛輪院——後の三寶院——の住職義演准后が克明に書きつけた當時の日記(慶長一年—元和十年)が現存して居るためである。

豊臣秀吉は慶長三年醍醐で花見を行ふため正月早々から諸種の準備をなしたのであつたが二月二十日には金剛輪院の庭園の設計を彼自からなしたのである。彼の設計は

「泉水ノナワハリ中島ニ護摩堂檜皮葺一字橋サカケ瀧二筋落サルヘキ御工也。聚樂御屋敷ヨリ名石可引由被仰出了。  
泉水ノ餘水櫻ノ馬場ノ中ニ横三間ニ可掘下被仰出了」

であつた。

歴史上有名なる醍醐の花見のあつたのは慶長三年三月十五日であつて秀吉の設計による金剛輪院庭園の築造に着手したのは其後の四月七日であつた。この日庭奉行竹田梅松御手傳新庄越前同じく御手傳平塚因幡の三人が縄張を行ひ翌八日に庭師「仙」が人夫約三百人を指揮して池に大石を引き入れたのを初めとして九日には藤戸石を新庄越前奉行のもとに主人石に用ひ十二日には庭普請最中に秀吉自から出張して築庭を監督し「門跡堂泉水ニサシ合ノ間早々コホツヘキ由

「徒下知」になり此等の建築物は直に取除けられた。この庭普請は急速に進められ五月十三日には終了し十四日に三人の庭奉行は秀吉の前に伺候して築庭終了の報告をなしてゐる。

六月三日に川原者與四郎兄弟三人が金剛輪院庭園築造のため初めて義演准后に面會した。秀吉は八月に病死したのであるが彼の意志による佛寺建築物の復興は彼の死後も行はれ十二月中旬には其大部分が完成した。豊慶長四年一月廿九日中島に梅の古木を植ゑたのを手始めとして再び作庭は川原者與四郎の手に依て行はれこの時は主として常御所南庭が築造された。慶長五年二月一日二日に池の北汀に梅を植ゑ石組をなし中島の西南に小橋を架けたのが川原者與四郎の名による最後のものであつた。

慶長七年一月には灌頂堂の西庭に池を掘り石を立て二月には護摩堂と寢殿の間に泉水を掘り入れ石橋を架け且つ作庭の爲庭師賢庭が初めて來たのであつてこの後元和九年二月まで約二十二年間この庭園の手入には多く賢庭が關係してゐる。彼の経歴は明かで無いが慶長廿年(元和元年)九月三日の日記に

「院(後陽成院)御勅定ニテ賢庭ト云天下一ノ上手也。度々召寄。石立様非凡慮。奇特々々」  
「あるをみても彼が如何に作庭の妙手であつたかを知り得るのである。

慶長八年から十三年八月までは庭園に何等變化なく同年九月には蓬萊島の形を縮少し池の泥さらへを行ひ十五年十一月には更に蓬萊島を改造し寢殿正面の築山を築く等金剛輪院庭園は完成の域に達し同月十八日の日記に

「泉水悉周備。恐ハ王城ニモ無比類田風聞。賢庭ニ祿被下丁」

「ありこの庭園が京の内外に最も高い名聲を博するにいたつたを知り得る。

慶長十五年以來元和十年までに慶長十七、十八、十九年及び元和五、六、七年以外の各年には規模の大少の差はあれ  
庭園の改築補修を行つてゐる。慶長廿年九十月には可なり大規模に且つ熱心に作庭が行はれ特に瀧の石組には義演賢庭  
共に意を用ひ瀧口の立石の如き數回之を立直した程である。元和年間にも度々作庭が行はれ元和九年二月晦日に

「庭作賢庭親子弟今日歸。銀子一枚小袖二枚下之」

さあるのが賢庭のこの日記に現はれてゐる最後のものである。元和十年四月十三日鳴き鳴きを池に放したことには少から  
ず造園家の興味を引く。

この庭園に用ひられた植物の主要なるものは松、檜、楓、杉、柏木、桟、椿、梅、櫻、梅、藤、柳、楓、朴木、蘇鐵  
櫻樹、牡丹、芍藥、つづち、杜若、蓮、一葉、忘草、卯木等である。

慶長三年秀吉の命による築庭から元和十年までの約廿七年間にこの庭園が可なり改築補修せられかくして完成せる當  
時の庭園と現在の庭園とを比較し其變化の程度を明確にするのは困難である。しかし當時の庭園には獨立した池が少く  
まも二箇所あり現在は一箇所であることを純淨觀と彌勒堂とが徳川時代に移築せられたことや常御所に造られた富士山  
が見られない、「こなまはこの庭園の最も重要な變遷とみるべきであらうが現在の池を中心とする庭園の大部分は慶長  
元和時代のものと大差ないものと考へらる。